

不完全な自分自身を自覚して

山梨県 長泉寺住職 水庭 浩章

「人間は、そのまま完全である。しかし、そのままでいられる人など一人もない。」

本当にそんなことが可能なかどうかの問題ではなく、この言葉が、仏教の根本であるという事です。

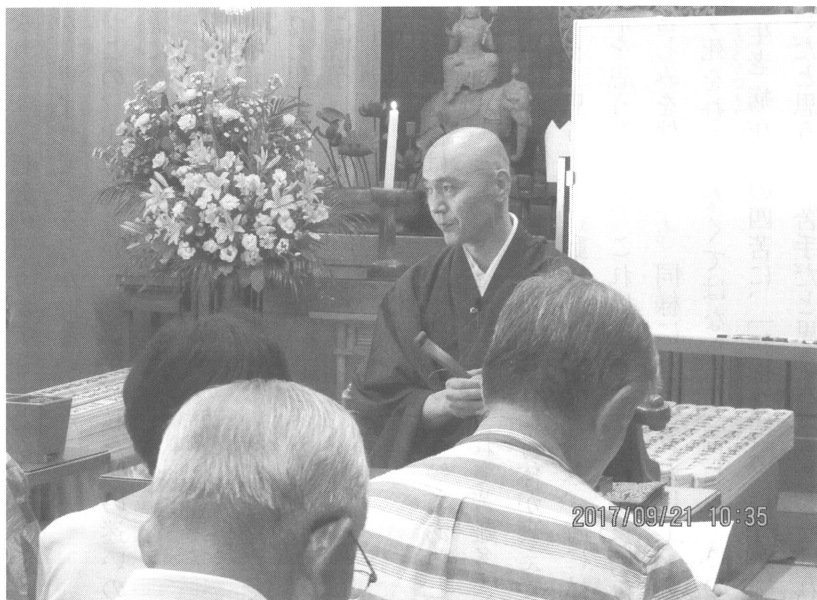
人間は、そのまま完全である。皆様も私も。お互いにパーフェクトな存在です。しかし、残念ながらそのままでいられる人など一人もいません。

仏教の教祖、お釈迦様はお生まれになった直後に、右手で天を指差し、左手で地を指差し、「天上天下唯我独尊」とお唱えになられたと、

一見、非常に傲慢な言葉にも捉えられてしまいがちですが、この言葉は、決してお釈迦様お一人が尊い存在であると言っているのではなく、生きとし生けるもの誰しもが、皆平等に尊い存在なのだということを言っています。ひとりひとりが「天上天下唯我独尊」であるということです。

後進の弟子たちによって伝えられています。

ですから、本来「人間は、そのまま完全で



ある。」のです。

しかし、そのままではいられないのが人間です。代表的なものが、貪^{むさぼ}りの心、瞋^{いか}りの心、愚^{おろか}かな心、仏教ではその三つの心を「三毒^{さんどく}」と言いますが、三毒にすぐに支配されてしまうのが人間なのです。

皆さんも、自分の胸に手を当てて思い起こしてみてください。心が落ち着いた状態でいても、すぐに不安定になってしまったことはありませんか。

恨んだり、僻^{ひがみ}んだり、嫉^{ねたみ}んだり、怒^{いか}ったりと。穏やかな心はどこへやら、一瞬で変わってしまいます。その時、心は三毒に支配されています。では、なぜ私たちはそのままではいられないのか。それは、私たちが思惑や打算する心を働かせているからです。

その心がある限り、私たちは必ず何かと比較しながら、他者と比べながら生きていくことに

なります。自分のほうができるとかできないとか。恵まれているとかいないとか。

この、比べるという行為が、私たちの迷いの源になっているのです。

その迷いとは何処から来るのか。

それは、満たされることのない欲望を満たそうと思う心、逃れられない苦しみから逃れようと思う心からです。

お釈迦様は、この世は苦しみの連続であるとおっしゃいました。それは、生まれて苦難多き人生を歩む苦しみ、老いとともに身体が衰えていく、思うように動けなくなる苦しみ、時には病を患う苦しみ、これは本人のみならず家族も苦しみを伴います。同様に、生まれた以上、必ず死をむかえなくてはならない苦しみ、この「生老病死」の四苦に、「怨憎会苦」、自分が嫌いだと思う人、苦手だと思ふ人とも会わなければ

ばならない苦しみ、「愛別離苦」、大切な人との別れからくる苦しみ、「求不得苦」、自分の思い通りにならない苛立ちからくる苦しみ、「五蘊盛苦」、人間であるがゆえに様々な苦しみから逃れることができないという苦しみ、このことを「四苦八苦」といいます。

私たちは、これらの苦しみから逃れようともがいても、決して逃れることはできません。その苦しみがあるがままに受け止め、生きていくことの大切さをお釈迦様は説いておられます。

苦しみには必ず原因があります。その原因とは、先ほどもお話しいたしました満たされることのない欲望を満たそうと思う心、逃れられない苦しみから逃れようと思う心です。今置かれている現状は変わりません。その現状から目をそらすことなく、前向きに受け止めていくことが大切です。発想の転換です。どのように生きても同じ時間が流れるのですから。

その生き方の道しるべとして、お釈迦様は八つの正しいお言葉をお示しく下さいました。そのことを「八正道」といいます。「道」とは、「みち」ということではなく、「言う」という意味があります。ですから、八つの正しいお言葉ということです。

「正見」、世の中を公平に見る眼を持ち、「正思惟」、常に偏りのない思いを巡らせ行動し、「正語」、人を傷つけるような言葉を使うことなく、「正業」、悪いことはせずに善い行いを心掛け、「正命」、自分が生きていく意味を見失うことなく、「正精進」、世のため人のために生きることを誓い、「正念」、生きとし生けるものはみな平等に尊いものであるという意識を忘れることなく、「正定」、そのためには、いつでも静かな心、調った心でいることが必要である、というお示しです。

この、「八正道」の教えを意識し、実践している姿が「天上天下唯我独尊」、そのままで完全な姿であるということです。その時には、貪り、瞋り、愚かな心の「三毒」に代表される「煩惱」を抑えて、心やすらかな状態でいられるでしょう。実践していくことが大切なのです。

私たちは身体の様々な箇所から情報を集めています。それは、目・耳・鼻・口・体・心の六つの認識作用から得る、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、知覚、このことを六識といっています。この六識によって、様々な情報を分別・認識・判断します。時には危険を感じたり、時には快楽を感じたりと。

私たちは、「八正道」でご説明したように、正しい理性を働かせ、正しく認識、判断しながら生きていくことが求められています。そのために、調った心、正しい知識を常に保っていく

必要があります。

同時に、私たちは「不完全」な人間であることも意識していかなくてはならないでしょう。

六識は、私たちが認識できる表面的な感覚作用ですから、意識的に抑えていくことはできません。

問題なのは、私たちの意識しないところ、つまり、潜在意識です。

この潜在意識は、大きく分けて二種類あります。一つは、私たちが生まれてから長い年月をかけて、生きてきた中で蓄積された知識や経験、時には親から聞いたこと、時には先生や友人知人から聞いたこと、また、最近ではテレビやインターネットの普及に伴い、そこからの膨大な情報などが心の奥底に存在し、無意識のうちに私たちの認識、判断に大きな影響を与えているということです。

私たちは無意識に様々なものをカテゴリー化しています。例えば、男らしさ、女らしさがあるんですね。その定義は何なのか、はっきりした答えはないんです。だけど、男らしい、女らしいと何となく決まっていますよね。

小学校六年の息子がいるのですが、その息子が小学校入学前、ランドセルを買うときにこんなことがありました。

「何色のランドセルがいいの」と聞くと、即答で「赤」と答えました。私が小学校時代には「赤」か「黒」のランドセルしかなく、当たり前のように女の子は「赤」、男の子は「黒」のランドセルを使っていました。今ではいろいろな色のランドセルがあるんですね。おそらく息子は戦隊もののヒーローが赤だったから「赤」と言ったのだと思いますが、私の連れ合いが「赤は女の子っぽいから、違う色にしよう。」という「えー、それじゃ、黄色」と答えました。

買いに行った店に黄色いランドセルはなく、実際に黄色のランドセルが商品としてあるかどうかはわかりませんが、「それも女の子っぽいから」ということで、最終的には「青」に落ち着きました。

でも、男の子は「黒」や「青」で、女の子は「赤」や「ピンク」や「水色」のランドセルと決まっているように思えますが、その定義はと聞かれると言葉に詰まってしまいます。

実際、息子に「なんで」と聞かれたときに、ちゃんとした回答はできませんでした。

また、公衆トイレの表示では、男性用は黒色・青色が多く、女性用は赤色が多いですね。皆様も駅や高速道路のサービスエリアなどで公衆トイレを利用するときに、青色と赤色のマークがあれば、本当に男性用かな、女性用かなと、人の形や書かれている文字まで確認しないですよね。自然と男性は青い方に、女性は赤い方に向

かうと思います。カテゴリー化は脳の省略化とも考えられ、実際に、私たちが生きていく中で、そのような習慣力は、日常生活で非常に好都合であり、大いに役立っていると思います。

しかし、その潜在意識の中にある固定観念が、時に偏見となり、差別をしてしまうことがあります。

例えば、強面の人の容姿を見ると、「あの人は怖い人だ。近づかないでおこう。」とか、真面目そうな人を見ると、「あの人は信用できそうだ。」とか、見た目だけで判断することはありませんか。しかし、強面の人がみんな怖い人なのかというとそんなことはなく、真面目そうな見える人がみんな真面目なのかというとそんなこともありません。私たちは、長年蓄積された潜在的な知識だけで、その人の内面を見ようとせず、先入観だけで判断してしまうところがあるのです。

そのことが、差別の心を生み出し、人を傷つけてしまうこともあります。

そのような潜在意識があることを、自覚しながら生きていかなくはなりません。

もう一つの潜在意識は、人間は本能的に自己中心であるということです。

この潜在意識がとても厄介です。

例えば、閉店間際のお買い物。

店内で間もなく閉店を告げる「ほたるの光」のBGMが流れている中、間に合ったと慌てて店に入る。目的の商品を手にとってレジに向かい、会計を済ませて外に出るころには、出入り口が人ひとり通れるだけ開いていて、駐車場にはほとんど車が止まっていない。車に乗り込み、エンジンをかけると、営業終了時間を十五分も過ぎている。

にもかかわらず、「間に合ってよかった」と

ほっとすることはあっても、対応して下さった店員さんに感謝することや、閉店時間を遅らせてしまつて申し訳ないという気持ちでできない。

もしかしたら、店員さんの中には、そのあと大切な予定があつた人がいたかもしれない。ご家族がいれば、いつもより帰宅が遅いのを家で待っている人がいるかもしれない。

私はそのようなことを一度や二度ではなく、幾度となく、自分では悪気なく、無意識に「当たり前」だと思い込んで繰り返していました。

そのことに気づかされたとき、自分自身が情けなく、本当に反省をしました。

当たり前だと思つていたことが、実は当たり前前のことではない。そこには人々の自己犠牲と奉仕の精神がある。そのことに思いを廻らせなければなりませんね。

「自分がいなければできないと思うことは独善である。」

これは、私の上司役の和尚様が、常々いわれるお言葉です。

「独善」とは、字のごとく「独り善がり・自己中心的」ということでしょうが、この上司の言葉が私の意識をがらりと変えてくれました。

私は、和尚になる以前から、他の人には負けない、自分にしかできない力をつけることを目標に生きてきました。

それが、自分が生きていく手段にもなるし、「この和尚は特別だ。」と思われれば、お寺の為にもなると思つて。

上司の言葉は、今までの私の生き方とは正反對の言葉ですが、その理由を聞いて納得致しました。

私は、先程ご紹介いただきましたように、現

在、東京都港区にあります大本山永平寺別院長谷寺という修行道場に、修行僧の指導役として身を置き、間もなく三年が経とうとしています。

就任当初は、修行僧のお手本とならなくてはと思い、また、同じ修行道場にいる和尚様方からも早く認めてもらいたいと思い、自分にしかできないことを考え、そのことを目的としていました。

しかし、そんな私の心の内を読まれたのか、上司と二人で話しているときに「自分がいなければできないと思うことは独善である。」といわれました。

その理由は、私たちはそれぞれ自分の住職地や副住職地があり、修行僧の指導役として一定の任期を勤めています。後任の和尚様が入ってきて、同じように指導していかなくては修行僧を迷わすだけになってしまいます。

しかも、この世は無常で、いつ何時自分のい



のちが尽きるかわからないお互いです。その時に、自分一人で抱え込んでしまっていては、残された人が困るでしょう。誰がその役にあたっても困らないように、そのことに思いを廻らせていくことが大切だと教えられました。

その上司の教えは、早速私の身の回りで活かすことができました。

私にも住職を務めているお寺があります。しかも二か所。一か所は、山梨県甲府市にある長泉寺というお寺。もう一か所は甲府から車で一時間ほど離れた山梨県都留市にある永寿院というお寺です。

修行道場就任にあたり、二つのお寺のお檀家様にもご理解していただく必要があります、その話し合いの席で、甲府のお寺は私の連れ合いが管理し、都留市のお寺は、近くに住んでいる私の両親が管理をするということになりました。

その間、お檀家の役員様を中心に、行事の準備や清掃などをしていただけることになりました。

非常に有り難く、そのお陰で、私は修行道場に就任することができました。

ある時、住職である私に何の相談もなく、檀家の方の奉仕で清掃する日が決められました。

「えっ、その日は帰れませんよ。」と私が言うのと、役員さんから「いいよ、方丈のことは当てにしてないから。」とか、「いても大した戦力にならないから。」と言われました。口は悪いですが、これもお檀家様のやさしさだと感謝しております。

こんなこともありました。昨年の夏、あるお檀家様がお父様の年忌法要をすっかり忘れていて、直前に申し込んでこられました。その時に、受け付けた私の連れ合いに対して「方丈さん忙しいだろうから、奥さんでいいよ。真ん中に座

っててもらえば、あとは自分たちで鐘や木魚を鳴らして、みんなでお経を読むから。」と言われました。

それには、さすがに私の連れ合いも困ってしまつて、私に連絡があり、確かにその時期は忙しかったのですが、外出の許可をいただき甲府に帰りました。

法要の準備をしていると、そのお檀家様が来て私の顔を見るなり、「なんだ、方丈さんいるのかよ。今日は奥さんに勤めてもらえろと思つて楽しみにしてきたのに。」と、明らかにガツカリした様子でいわれました。

なんだよ、せっかく帰ってきたのにとの思いもありましたが、それよりも、私が留守をしていても、お寺を支えて下さっていることを感じ、とてもうれしく思いました。

法要は、少しそのお檀家様の思いに添えなかったかもしれませんが、私の連れ合いにも参加

してもらい、みんなで法要を築くことができ
ました。

しかし、私が住職地であるお寺を空けて一番
困ったのはお檀家様のお葬儀のときでした。私
が住職をしている地域は、お檀家様がお亡くな
りになられた連絡を受けると、故人様の枕元で
読経をする「枕経」の習慣がある地域です。

同じ町内に二つのお寺があり、一つのお寺で
は枕経のお勤めをするけど、もう一つのお寺で
は住職が普段留守だからという理由で枕経には
伺えないというわけにはいきません。

とは言え、修行道場に身を置いて以上、
すぐに駆け付けることも出来ず悩んでいました。
いろいろと考え、お檀家の役員さんにも相談
して、枕経には私の連れ合いと、役員さん一人
がついて伺うことに決めました。連れ合いも、
最初は抵抗があったのか渋っていましたが、最

終的には覚悟を決めてくれました。

枕経では、読経するだけでなく、葬儀の打ち
合わせ、故人様の生前の様子などをお尋ねしま
す。その流れを、連れ合いに事細かく説明し、
連れ合いも一言も漏らさずにノートに書き記し
ていました。

ところが、いざその時が来ると、私は心配で
仕方がありませんでした。連れ合いに「大丈夫
か。あれは持った？、これは持った？、これこ
れこうやるんだぞ。」と言ったり、「なんとか時
間をつくって私が行こうか。」とまで言いました。
すると、連れ合いが電話口でこう言いました。
「そんなに私のことが信用できないの？ そ
んなに任せられないの？ だったら最初から修
行道場就任の話は受けなければよかったじゃな
い。こうやっていこうとみんなで決めたのだか
ら私に任せて」と叱られました。

「自分がいなければできないと思うことは独善である。」

最初にお話しいたしました上司の言葉。まさに、私の言動は「独善」でした。

何でも自分ができれば安心できるし、また、自分にしかできないことがあれば自分の立場を守ることもなる。皆様も、そのような思いをされたことはないでしょうか。しかし、自分がいなくなった時のことを考える人は、意外と少ないような気がいたします。

その考えが、時に後継者の成長を妨げたり、人に不快の念を抱かせたりしてしまうこともあるのではないのでしょうか。

すべてのことを自分一人の力ではどうすることも出来ない。なぜなら、この世は無常であり、一瞬たりとも同じ状況で留まっていけないのですから。いまあるこの命も、明日にはどうなっているのかわからない。そのことに目を向ければ、

「独善」ほど無責任なことはないですね。

一緒に行っていただいた役員さんから、「奥さんは緊張しながらも、大きな声でお経をお唱えされていて、打ち合わせの時も安心して見られましたよ。」とお聞きいたしました。

お葬儀の後、喪主さんに「この度は、枕経に私が伺えなくてすみません。」というと、「いえいえ、奥様に丁寧にお勤めいただいたので、おばあちゃんも喜んでいられると思いますよ。」と云ってくださいました。

それからは、枕経のときには、安心してといえ、嘘になるかもしれませんが、連れ合いを信じてお任せいたしております。そのことが、今の私たちにできる精一杯の形です。

いまお話しいたしましたことは、まさに私の潜在意識の中にある、本能的な自己中心の現れです。

人は一人では生きてはいけません。必ず他者にすがりながら生きています。食べるものにしても、身に着けているものにしてもそうですね。みんな、お互い様のなかで生きています。そのことに目を向ければ、自分勝手に生きていくことがとても愚かなことだと思えますよね。

福井県の大本山永平寺、今私が勤めております永平寺東京別院の本院に当たってお寺ですが、その永平寺をお開きになられました道元禪師様がこんな詩を残されております。

私が山を大切にすると、
山も私を大切にしてくれる。
大小の岩や石も、
休むことなく語りかけてくれる。
白い雲や山の木々の移り行きの中で、
すでに俗世間の煩わしさは

忘れ去ってしまった。

大自然のなかの永平寺で詠まれたこの詩は、道元禪師の山に対する愛、山を自分の身に引き比べて、山と一体になって生活していた姿を窺い知ることができます。

「私が山を大切にすると、山も私を大切にしてくれる。」という「山」は、「自然」や「環境」に置き換えることができます。また、「他人」にも置き換える事ができますでしょう。

「他人」を大切にすると、「他人」も私を大切にしてくれる。直接的なこともあれば、間接的なこともあるでしょう。すぐに結果が見えることもあれば、将来に結果が見えてくることもあるでしょう。自分が思いもよらないところから恩を受けることもあると思います。大切なことは、見返りを求める心を起こすことなく、「八正道」の実践を行っていくことです。

世の中を公平に見る眼を持ち、常に偏りのない思いを巡らせ行動し、人を傷つけるような言葉を使うことなく、悪いことはせずに善い行いを心掛け、自分が生きていく意味を見失うことなく、世のため人のために生きることを誓い、生きとし生けるものはみな平等に尊いものであるという意識を忘れることなく、いつでも静かな心、調った心でいる。

ただただ、八正道を意識して行じていく。そのことが、みずから意識しようとしてもどうにもならない潜在意識を、おのずからコントロールすることができるようになります。

「人間はそのまま完全である。しかし、そのままではいられない人など一人もいない。」

その「不完全」な自分を自覚しながら、「八正道」に沿った生き方をしていく。無意識の潜

在意識をもしっかりとコントロールしていく。その姿が、「そのまま完全な自分」であり、決して比べることのできない尊いお互い様です。

本日は秋彼岸の二日目です。彼岸とは、どちらにも偏らない、自分と他人とか、そういった垣根を取り除いた状態です。そのときには、みずから関わる世界が、おのずから彼岸になります。つまり、安楽の世界になります。

先ずは、この後の彼岸法要。分け隔てなく、平等に供養をするお姿を、ご先祖様方に示してまいりましょう。



宋山青蓮年歌天